

研究主題 情緒障害教育における障害特性に応じた自立活動について ～特別支援教室等における児童・生徒のアセスメントと専門的な指導～

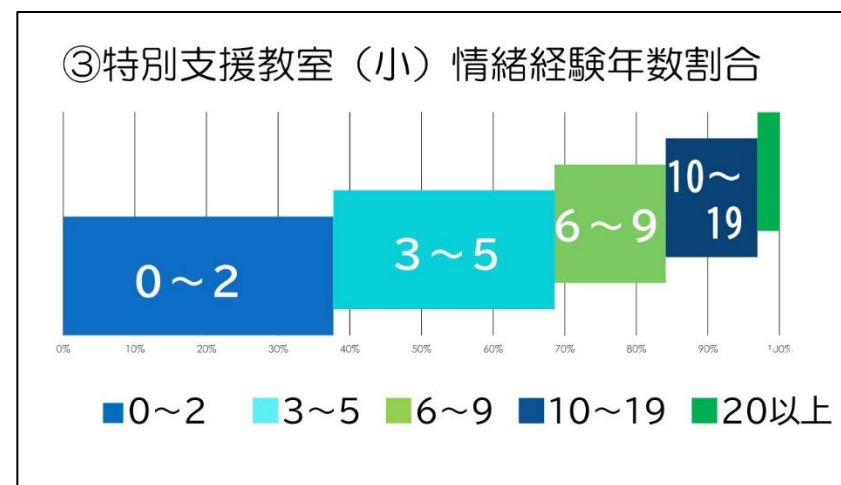
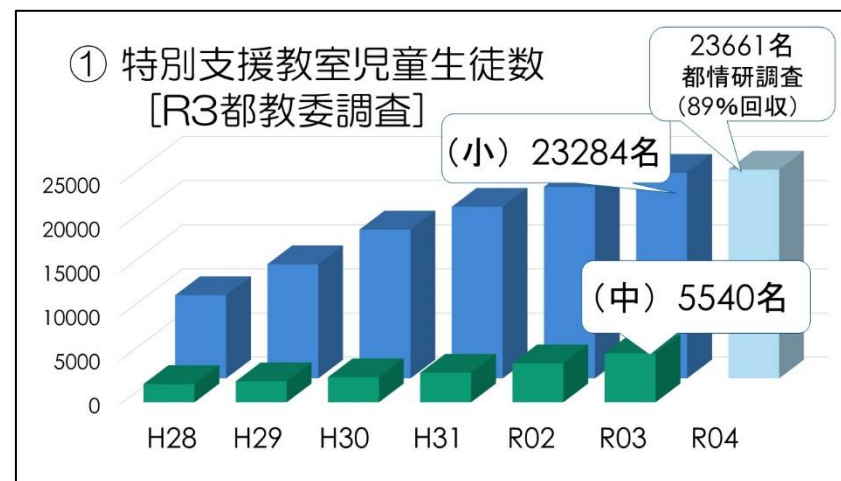
I 団体の概要

本会（略称：都情研）は東京都の特別支援教育の充実・発展に寄与することを目的とし、情緒障害教育、発達障害教育等に関する専門研修を通して、教職員の専門性向上を目指している。研修会は全都の公立幼・小・中学校教職員、区市町村教育委員会職員等が対象となる。具体的な研修会として、全都を5ブロックに分けて開催する地区ブロック研修(年間6回)と、全都を対象に開催する全体研修(年間4回)を設定している。また、情緒障害通級指導学級時代から継続的に実態調査を実施し、それらを踏まえた上での実践的な研修となるよう努めている。

II 現状と課題

都内小・中学校全校に特別支援教室が設置され、利用者数が年々増加し、小学校約2万4千人、中学校約5千人、計約3万人となり、それに伴う教員数の増加(約3千人)も著しい。情緒障害教育経験年数5年以下の教員が全体の約7割を占め、効果的な指導が行われるためには担当教員の専門性の向上は必須である。ここ数年、特別支援教室での社会性指導の活動集等は多くの場で手に入れることができるようになったが、子どもをアセスメントする力量が未熟なため、その教材をどの段階の誰に実施すれば良いかが分からず、指導の効果が上がらないという現状が見られる。また、「特別支援教室運営ガイドライン」による原則の指導期間についての解釈も地区ごとに様々で、混乱している現状が見られた。これらの課題を踏まえ、各研修会の内容を設定し実施した。

★令和4年度 実態調査より抜粋



Ⅲ 夏季研究大会【7月22日(金)開催】

総会記念講演に続き、北海道大学准教授：岡田智先生を講師として招き、都内4地区の実践報告を行い、具体的な指導の実際を参加者と共有する機会を設定した。障害特性を踏まえた上での指導のパッケージ化と、その子の発達段階を含め、その時点での状態像を踏まえたオーダーメイドの指導の両面が必要であることをご示唆いただいた。また、岡田先生の調査研究では指導時間が短い場合には指導の効果が低く、むしろマイナスになる場合もあるという話題も提示いただいた。(以下は世田谷区立松沢小学校の実践より抜粋)

<p>松沢小学校すまいるルームの指導</p> <p>○児童の実態に応じた指導時数を設定 ⇒特に、ASDの特性が濃い児童、学習態勢ができていない児童には、4時間指導(半日)を積極的に実施している。</p> <p>○教員全員で動く ⇒OJTを効果的に行うため。若手教員の育成。</p> <p>○小集団の構成人数は6名～10名程度 ⇒個別は1対2・3が基本。学習態勢の確立が欠かせない。 近い学年、特性の似ている児童を集めて指導。</p>	<p>今年度の初めごろのこと… (火曜日4時間グループ)</p> <p>Aくん…はじめの会の「起立」の号令で立たずに固まる。 T「理由は？」C「なんで立たないといけないの？」 Bくん…虫が気になり、弛業のタイマーに開かず… Cくん…中休みのドッジビーで負けて落ち込み、3時間目の学習に参加できず… Dくん…「コミュニケーション」の学習で盛り上がりすぎてしまい、LTが話そうとしているのに私語が止まらない… Eくん…やる気満々で挙手をするも、教員が別の子を指名すると黙って文句を言い続ける…</p>
<p>火曜日グループの特徴</p> <ul style="list-style-type: none"> ・中学生10名(4名は3、4時間目のみの2時間)で構成されたグループ。 ・知的発達水準はどの子も年齢相応に位置する。 ・ASDの特性がほとんどの子にあるが、ADHD傾向を併せ持つタイプが多い。 ⇒体を止める、行動を切り替えることに苦手さがあるため、全体指示を適切に聞き、周囲に合わせながら行動することが困難。 ・感情のコントロールが上手にできない児童が多い。 ・自分の行動が他者にもどのような影響を与えているのかわかっていない。 ・叱責される経験が多く、褒められる経験が少ない。 	<p>行動、感情の切り替えをテーマに</p> <p>切り替えるってどういうこと？ 「今やっていることを止めて、別の行動を行うこと。」 「今考えていることを一旦置き、別のことを考えること。」</p> <p>切り替えがうまくいってどういうこと？ 「皆を待たせなくていい。」 「時間内に間に合わせられること。」 「ま、いっか！」できること。 ⇒周囲との比較、共同の中で起きる ⇒小集団の中で指導を行うことに意味がある！</p>
<p>オーダーメイドの授業(コミュニケーション)「切り替えゲーム」(全3回の計画)</p> <p>ねらい</p> <ol style="list-style-type: none"> ①「切り替える」ということがどんなことなのかを知る事ができる。 ②「切り替える」の会場で活動を止めて、自席に戻る事ができる。 ③思い通りにいかない場面でも気持ち切り替えて最後まで活動に参加することができる。 <p>ルール</p> <ul style="list-style-type: none"> ・3つの課題にチームで取り組む。 ・「切り替え！」の会合が出たら自席に戻り、良い姿勢をする。 ⇒全員が良い姿勢になったら秒間キープ。合格しなければ次の活動に移ることができない。 ・5分間で、3つの課題をクリアしたら成功！ 	<p>大切にしたいのはここから！！</p> <ul style="list-style-type: none"> ・小集団指導でできたからといって、実際の生活場面ではできない。 ⇒子ども達が「何に気をつけるべきか」「どうしたらうまくいくか。」を知覚して知り、実際の場面で「このタイミングで使うのか！」と実感を伴った経験しなければ意味がない。 ・4時間という生活の中で、「切り替え！」のフレーズや切り替えなければならぬ場面を多く設定し、実行させ、成功体験に繋げる必要がある。 ・小集団指導を「布石と共有場面」とし、個別指導を「振り返りや個々の目標設定の場面」とし、すまいるルームの生活全般を「実践の場」として考え、指導を組み立てるようになる。

Ⅳ 秋季セミナー【11月15日(火)開催】

元中教審委員：田中容子先生、東京都教職員研修センター：増田知洋指導主事をお招きし、本会会長伊藤校長、上山指導教諭と共に「特別支援教室における指導目標と原則の指導期間の考え方」をテーマにパネルディスカッションを実施した。この中で増田先生からは「特別支援教室運営ガイドライン」にもあるように、「原則の指導期間を定めて指導を終了すること自体が目的とならないように、重要なのは、適切な実態把握の元、毎年の指導目標の設定と指導の評価を適切に行っていくことである」とお話しいただいた。原則の指導期間の意味合いは、『基本的に1年間しか在籍できません、最長2年間までしか在籍できません』ということではなく、2年間の指導に対して成果を確認し、指導目標の達成に至らなかった場合は、改めて適切な支援の在り方から考え直そう、ということが大切であることを確認した。

Ⅴ 次年度への課題

今後は、適切なアセスメントを基にした目標設定、効果的な指導、指導の評価をより具体的なケースを通して積み重ねる必要がある。特別支援教室及び本会に対する期待に応えるべく今後も実践的な研究に努める。

<連絡先>

団体名		東京都公立学校情緒障害教育研究会
代表者	所属	墨田区立業平小学校
	職 氏名	校長 伊藤 康次
	連絡先	03-3625-0331
事務局	所属	西東京市立東伏見小学校
	職 氏名	指導教諭 上山 雅久
	連絡先	042-463-4517